

2021. 6. 20. 主日礼拝説教
聖書：コリントの信徒への手紙 I 1章 1-9 節
『平和は欠点のあるところから』

ターミナルケアのホスピスなどと言うといかにも専門的な響きで、末期症状の患者さんの魂を究極的な救いをもって取り扱うかのように考えがちでしょうがそんなことはありません。わたしたちも重い病の方を見舞う時、どんなに慌ただしくとも患者さんと話す時はベッドサイドに立って見下ろすように話さないで、出来るだけ座って目の高さを並行にして話すようにする点はまったく同じなのです。それは、見舞客＝生き残る人＝強い人、患者＝死ぬ人＝弱い人という関係にしないためなのです。「私が死んだら・・・」などと話す人には、「私の方が先に死ぬかも知れません」と話します。わたしもあなたも互いに死ぬという有限な存在なのです。ただ少しだけその時が早く来た人と、これから来る人の違いだけという対等な関係で患者さんと接すると、互いに心が通い合う共同作業としてのケアが見えてくるのが往々にしてあるものです。

ニューヨークにある世界最大級のターミナルケア病棟(ガルバリー・ホスピタル)の玄関には「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と書かれてあるそうです。この言葉は創世記 28 章 17 節です。ひとり寂しく兄エサウから逃れて旅するヤコブが、まさにその寂しい荒野のただ中にも神の守りがあり、自分に寄り添ってくれた神を知って発した言葉です。最も心細い、孤独な、耐えられないような苦しみという欠乏の中で、ヤコブは初めてわたしとあなたという対等な立場に立たれる神が居たもう事実を体験したのです。メーヌ・ド・ビランという人が「健康はわれわれを外に連れて行き、病気はわれわれを内に連れ戻す」と言いましたが、最大の欠乏と考えてしまう孤独や病や死を前にして、初めて神による平和を発見することに導かれるのです。

コリントの教会は、トラブルが多く、決して立派な教会ではありませんでした。しかし、そんな状況をよく知ったパウロは「すべてに恵まれ、欠けることがない」とあえて言うのです。それは「キリストにあって」という言葉が添えられて言われていることです。例えば、神を ∞ (永遠)とすると $10 + \infty = \infty$ ですし、 $1 + \infty =$

∞でもあります。どんなにダメな人間でもキリストの愛があるなら、その人は変わる可能性を持っています。欠点は互いに非難し合う機会となるのではなく、助け合う機会となります。そのような関係こそパウロがコリントの書簡で語る神の平和なのではないでしょうか。

わたしたちは、自分に欠けがあると、何とか欠けている部分を何かで埋め合わせて、もしくは手に入れて欠けのない自分になることで平和を手に入れたと思ってしまうがちです。そのためにいさかいを起こしたり、戦争さえ始めるのです。武力による平和、経済力による平和と、国も個人も求めては破れてダメージを受けて来ました。しかし、キリストはそこに立って語りかけておられたのです。思い通りにいかない苛立ちの時、心細い不安の時、投げ出したくなる恐れの時を通して「この痛みは、あなただけのものではない。全ての人のものだ。私は、人間としてのこの共通の破れの中に立ち続け、人と人を結び合わせようとしているのだ」と今も語りかけられるのです。

聖書の問う平和とは、落ち度のない相手、又は自分になって生まれるのではなく、互いに同じくらい欠けの多い者、助けを必要としている者という認識から生まれてくるのです。